

くろっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成十五年八月一日発行（毎月一回一日発行）
第十卷第四号（通巻第一二二号）

鈴



くろっけ

俳句雑誌

GLOCKE

第112号

8. 2003

打水

品川鈴子

海芋の紙燭ずらりとエスカレーター

打水をのべつ幕無くモデル庭

炎帝に誰が負けるや喜寿特集

築山に走り根あらは青時雨



奥美濃の谿湯に蜘蛛の罫ののれん

斑を見分け合ふか緋鯉の瞬かず

能のたけなは香水が鼻につく

蹴^{シューター}男と頬擦りの髭汗こぼれ

勝ち男汗の頬擦りおほげさに

長老の内祝なるさくらんぼ



玉 鈴

大阪 鈴木浩子

句会してみたき次庵の春障子
ジェット機に力つきたる揚雲雀
菜園の出来ばえ問ふて蝶低く
蹠見す象に浮力や青葉風
天辺に子を乗せ亀の五重の塔

香川 陶山 泰子

山荘に足止めされて春の雪
カルスト岩にそれぞれの雪帽子
取り来るつらら洗面台に溶け
女湯に天狗ののれん山笑う
湯殿にはヴィーナスの像春の雪

香川 瀬口ゆみ子

鯨の下名園の鯉のぼり
田植え待つ水面は絶えず細波
静寂は太刀切っ先に聖五月
そよぐもの好みし庭に五月来る
打ち据える桴突き返す革に汗

吟

愛媛 武司 琴子

新婦より父のはにかむ桜鯛
腕白の口とがらせて粽解く
儘ならぬ卵の花腐し癌の位置
緑鳩の青葉がくれにかすれ声
つつじ明りに五分間停車の窓

大阪 竹下 昭子

合戦にあらず近江の行々子
秀次の運命劇を行々子
薫風に千余の狸陶器市
通い帳持つ陶狸風薫る
芍薬に案内申を僧の留守

大阪 田中嘉代子

石材店石灯籠が陽炎へり
桃長者桃の畑に鯉幟
青洲庵軒に十葉杉菜吊る
日脚伸ぶ青洲庵の大竈
雨のあとすぐに蜂来る花蜜柑

兵庫 田中敏文

水藻咲く笹舟くるり一回転
薔薇満開園児の列の見えかくれ
薔薇アーチくぐり香りのただよえる
造り滝数多連なり交響楽
噴水の連なり真白波打てり

大阪 谷 泰子

奔流に急かされてゐる桜狩
南禅寺日永に煙る浄香炉
花冷えの見返り仏は網の内
国籍はさまざま京の花人ら
高階のモデルルームに武者人形

愛媛 筒井圭子朗

スクールバスが運ぶ一人の新入生
子遍路も精進料理の膳に着く
泡風呂の泡と菖蒲に撥らる
立ち読みの左右香水匂ひくる
自選句の一句決まらずバラを嗅ぐ

兵庫 内藤 三男

種蒔いて名札に変はる種袋
耳鳴りにいつしか和して春の蟬
ぼうたんに庭中の風集りぬ
大步危や溪越え百の鯉幟
行く春の娘の書架にみずずの詩

大阪 中島 霞

街騒を遠くに濠の浮葉かな
添竹に忘れ軍手や豆の花
姿見に幼の手形明易し
招提寺拝して侍る風炉茶かな
松蟬や懐紙に拭ける指の先

大阪 中田征二

薫風やバスは開かずの窓ばかり
梅雨入前大河緩らか土佐の国
ボンネットバスに乗り込む夏遍路
叩きより刺身で食めよ初鯉
走り梅雨往きて大河のささ濁り

薬草歳時記

(一一一) マタタビ(木天蓼)・夏梅^{なつうめ}

市橋 章子

またたびを喰らふ青鬚越後人

沢木 欣一

猫によく出会う町で仕事をしていた頃、好奇心と悪戯心で、薬局のマタタビを少し失敬して、顔馴染の猫たちにあげてみました。よだれを流し、転がりまわってじゃれつき、全くの無防備状態。「猫にマタタビ、泣く子にお乳」とはよくいったもの、その反応ぶりには驚かされました。猫の脳髄、延髄を麻痺させる揮発性の成分があるからといわれています。同じネコ科のライオンやトラも同様に陶醉状態になるようです。

マタタビはサルナシ科マタタビ属、日本各地の山地や川辺にみかける落葉する植物。

六月〜七月初、芳しい匂いの梅に似た白い五弁の花が咲きます。面白いことに、つぼみをつけはじめるころから、葉の一部が白くなり、一見、白ペンキを刷毛で振り散らしたようで、簡単に見つけられます(白色現象)。花が散ると葉の白色は薄れ、九〜十月ころには元の緑色に戻ってしまします。木に登り

きり、天辺からあふれるように垂れ下がり、緑葉に白の散る様は、ブーケのようにも見えます。

花の中に、マタタビミタマバエが卵を産みつけ、卵を抱えたまま結実し、卵はその中で成長。その実の姿はごつごつとした瘤状(虫癭)になり、これを熱湯で殺虫し乾燥させたものを、生薬の木天蓼として薬用にします。鎮痛作用のあるアクトニジン、利尿作用のあるポリガモールのほかマタタビ酸、マタタビラクトン等を含有。血行をよくするので、冷え性、リュウマチ、神経痛などに応用。マタタビ酒や入浴剤にして使います。

正常な果実は、三センチほどのどんぐり状。生食、塩漬け等で食用にしますが、薬用にはなりません。

名前の由来説は①アイヌ語のマタタムブから。マタは冬、タムブは亀の甲羅の意で、瘤状の虫癭の様から。②疲れきった旅人がこの実を食べて回復し、また旅を続けた。③長い実と短い実が生るのでマタツミといった等。『牧野植物大図鑑』には①が記載されています。

多少の湿気があれば、鉢植えても生育し、窓辺の日除けに白銀の葉の涼味を楽しめますが、猫にはご用心。見付かったらおしまいです。

参考文献 「原色牧野大図鑑」 北隆館

「身近な漢方薬材事典」 東京堂出版

「図説花と樹の大事典」 柏書房

著者略歴 神戸薬科大学卒

マタタビ〔マタタビ属〕(またたび科) 木天蓼

Actinidia polygama (Sieb. et Zucc.) Planch. ex Maxim.

(英) Silver Vine

6月～7月に葉の裏にかくれるように蕾がつき始めるがこの小さな開花を虫に知らせるかのように葉の一部を真っ白に白化させる。花に虫が産卵し花が終わると葉は元の緑に戻る。



須賀
悦子
画

またたび

天蓼にはな見顔なる小猫かな

存

義

天蓼の花や山路の朝雫

五

明

またたびの花をやさしと折れば匂ふ

山口

青邨

またたびの花や落ちては噎ぶ水

石塚

友二

またたびの花散り朝の粥しゆげ座待つ

野澤

節子

掬みて清しまたたびの花映る水

林

翔

またたびの花へ女の手を引いて

青柳

志解樹

木天蓼の花に木雫真珠なす

小松崎

爽青

木天蓼や花ちる岩のたまり水

星野

麦南

またたびの実を漬けペンションアペリチフ

鈴木

愛子

ぐろつけ

鈴の奏

品川鈴子選

若葉風溪に飮す法太鼓 兵庫 伊勢ただし

妙見の髭題目や朴の花

朝掘りの筍を売る終着駅

川越えて藤の散りゆく大師道

メンソーレ牛車にゆられ夏の川 兵庫 長谷川としゑ

門七つくぐる首里城風薫る

麦稈帽畑で手を振る百二才

妹が喜寿の祝ひに黒日傘

入学に眠れぬ真夜のランドセル 大阪 宮村フトミ

書道展出でて茶房のさくらんぼ

金箔の竹落葉布く涅槃像

よちよちと蝶追ひ鼻に掠り傷

予後の春杖つく人に追い抜かれ 大阪 賀山 秀子

その昔仔猫拾ひし桜並木

神奈備^{かなべ}の村人が売る春大根

「おいら冷酒^{ヒヤ}！」叫ぶ声亡き句会あと

春の園縦横無尽に気根のぶ 兵庫 福島ゆき子

屋久杉の威風堂々春の雷

すべり落つ大川^{おおこ}の滝の雪解水

雨上り無菌の空の青葉照り

ちゃんばらの狼藉ありし今年竹 兵庫 松本 恒司

屈折率 高き溪水鮎育つ

青虫も添えて青菜の無人市

雲南の地より緑雨の島伝ひ

農いちづ母の命日麦熟るる 愛媛 伊藤マサ子

風通ふ医院を閉ぢし桐の花

閉づ銅山^{やま}に芍薬百花人を呼ぶ

母の忌を終えて夕の古茶新茶

朝茶事に夜叉^{やしゃ}五倍子^{ふぶし}染めの夏衣 兵庫 岡本 明子

紅きばら一番咲きを母に剪る

天をつくメタセコイアの新芽鉾

白藤の懸りて沢の暮れのこる

うつすらと髭とも見えて卒業す 大阪 尼寄太一郎

鳩くるり天地替へして潜りけり

餌を盗む鵲遠巻きに庭雀
岩田帯享けて普し春ひかり

和歌山

伊藤 迪代

さんざめくことなく雛みな焼かる

天覧の炭窯爛れ冴えかへる

熊野古道すたと行く雪女

雛焼かる金の焰を身にまとひ

徳島

河井富美子

氷とけ水煙あがる大瀑布

人声のかき消されたり大瀑布

大瀑布どこから見てもしづき浴ぶ

掬ひたるバンフの雪の燦めけり

京都

中崎 敞子

新樹光川沿ひ社の石ベンチ

三船祭茶人占む舟色香めき

緑さす社家に底見す禊の井

若楓川沿ふ社家の土堀越し

愛媛

高橋 英子

友見舞ふペットボトルに甘茶受け

真砂女逝く生家に卯波遠からじ

休日の少なき暮らし花は葉へ

板摩りをして露の香のなほ青し

愛媛

岡部三和江

子の風をパパ取り上げて夢中なり

春うらゝ漢仔犬をふところに

啓蟄や古稀の手習ひ賑々し
山桜闇やわらかに忍びより
再入院若葉横目に救急車
苛立ちも病のなせる春病棟
病窓に燕たまごを抱えおり
黄水仙一日一日に丈の伸び
草萌ゆる忘れな草も交り居て
剪定の音聞こえ来るかきね越し
何もかも洗いたくなる梅雨晴れ間
春の日に頬ゆるびたる磨崖仏
山すみれ鬼の石段あへぎつつ
朝靄の晴るる海峡囀れり
春落葉集めては敷く苗の元
冬二月半袖ですむ国に来て
道連れの欲しきときあり山薊
鈍足を嘲るもよし道をしへ
レモン水スコッチ訛りのウエイター
春雨に迷ひもなしに旅に出でし
老いたれど朝の身仕度風光る
自動扉蝶も一緒に入りけり
鶯や耳かたむけて六地藏

神奈川

八木 紀子

トロント

恩塚 典子

埼玉

岡田 章子

小田 知人

片渕 清子

秀 鈴 記

巻頭 三句 品川鈴子 評

四句 十五句 赤木真理 //

* 選句は全て 品川鈴子

妙見の髭題目や朴の花

伊勢ただし

日蓮宗の「南無妙法蓮華經」を俗に髭題目・はね題目などと呼ぶのは、文字の筆端を髭のようにはねて書くから。大阪北西の能勢には標高六百六十メートルの妙見山頂上に妙見堂があり、山岳仏教の聖域に咲く汚れ無い白い朴と、墨痕鮮やかな題目が際立つ。

門七つくぐる首里城風薫る

長谷川としゑ

旧琉球王朝は十五世紀から首里に尚氏の居城があった。十九世紀には明治政府に収公され、沖縄戦で惜しくも焼失したが、守礼門や正殿などが復元されたので、昔のおおらかな繁栄ぶりを思い浮かべ、風さえかぐわしく感じられた。

よちよちと蝶追ひ鼻に掠り傷

宮村フトミ

ようやく歩きだしたばかりの、たどたどしい足取りで、蝶々に気をとられ思わず追いつた児。柔らかい肌の鼻先に掠り傷が付き、何処かで転んだらしい。それ程蝶に夢中だったのか。

予後の春杖つく人に追い抜かれ

賀山 秀子

春の日差しの中をゆつくり歩いていると、杖をついた人に追い抜かれた。人はそれぞれの思いを抱いて同じ春を生きている。予後の人も杖つく人も。病後の切なさど春の明るさが交錯する溢れんばかりの作者の思い。

屋久杉の威風堂々春の雷

福島ゆき子

樹齢二千年を超える巨木も見られる屋久杉だが、その成長は遅いのだそう。我々の想像を絶する時の流れの中、ゆつたりと呼吸し続けてきた屋久杉は、春雷が聞こえ電光に空が明るくなる一瞬スポットライトを浴びたかのようにあった。まさに威風堂々。(以下略)